

感想

著者	高木, 市之助
雑誌名	龍南
巻	176
ページ	19-21
発行年	1921-02-11
URL	http://hdl.handle.net/2298/7565

感想

高 木 市 之 助

誠にとりとめも無いのですが、私の最近五年間の龍南生活から得た感想を申しませう。龍南に縁故のある既知未知の人々が此誌上で「君はさう思ふか、僕はかう思ふ」とか「君にもそんなかい、僕にもその通りだ」とか話しあふ事は三十年を記念するにふさはしい事だと思ひますから。私には熊本と云つても龍南と云つても同じ事のやうな氣がします。私の生活はそれ程龍南に籠居して居ました。従つてまたそれだけ龍南に親む事も出来たのです。

世間によく、「つきのわるい」と云ふ形容詞を冠せられる一群の人々がある。たとへば、一寸話して見るといかにもぶつきらばうで横平で、何か怒つて居るやうでもあり、威張つて居るやうでもあり、少し血のめぐりが悪いやうでもある。處が其實怒つて居るのでも、乃至血のめぐりが悪いのでもなく、單に所謂「つきの悪い」丈けの事だと云ふ事がわかつて来る。そして、さう云ふ人に限つて、つきあつて居る中にだん／＼味が出て来て、しまひには、しばらく其人に逢はないとさみしくてたまらないと云ふ程になるものです。熊本人をとすれば彼は先づこのつきの悪い人の部類に屬するだらうと思ひます。私は、修學旅行の途次、熊本に一泊して行つた或る都會地の中學生が、其校友會雜誌に、熊本を罵倒して居るのを讀んだ事がある。又二三年前、郷里の或る會合で、隣席の人が、丁度其頃出張して歸つたばかりの熊本を「つまらぬところ」として私の賛成を求めた事もあります。私自身も、大正四年の秋はじめて赴任した當座は、「旅愁」の外に確かに或

る「不快」があつたやうです。上通町あたりのふあい、その商店で受ける感じは龍南でも受けました。しかし此の感じは、時日の経過と共に自然に消えて行つて、其代りに、龍南の味と云ふか、熊本の味と云ふか、とにかく、眞の味がしみじみと味はれて來ました。そしてはじめの不快は、單に「つきのわるさ」から來て居た事がはじめてわかつたのです。

此味はしかし、私には到底説明の出來ないものです。唯本誌の讀者、殊に三年の熊本生活を經驗した人々には直ぐわかる事と思ひます。私はよく五高出身の人々。

「熊本はいゝ處だつたね」

「あゝ全く」

と云つたやうな話をします。そして心の奥底からうなづきあひます。それはこんな漠然とした言葉によつてさへも、はつきりと此味がわかりあふからです。あの剛毅木訥と云ふ標語も私には此味を假りに言ひあらはした言葉としか思はれない。正直の處、私は、世間普通の意味に於ける剛毅木訥といふ語には大した興味を惹かない、唯それが此の不可説の龍南乃至熊本の味に附けた記號となつた時、はじめてたとへやうのないなつかしさをひし／＼と感ずるのです。

此味は、或意味に於て阿蘇の持つ味に似ては居ないでせうか。抑もそれは例の「上る筈だよ五高の威勢」と云ふ噴火山の元氣に於ては無い。眞黒な煙が濛々と天日をかすめる、あれも確かに壯觀ではあるが、阿蘇の特色は、もつと外にありはしないか？、少くとも私にはさう思はれる。阿蘇は誠にふあい、その山です。高山名山と云はれる程の山は大抵「この偉大を見よ」と云ひたさうに人間に臨むところがある。謂はゞとりつ

くらうた美容がある。處が阿蘇には其れない。單に山容について云へば、大きな山波が、草原を被つてうね／＼と連つて居る丈けの山です。従て専門の登山家には、あそはあまり大した山とは考へられないやうです。私も大正五年の秋、今の山岳部の前身山岳會の第一回に加つて登山した時には、矢張り軽い失望を感じたのですが、二回三回と重なるにつれて、何ともたどへやうのないなつかしさをこの山から感ずるやうになつて來ました。此味がそのまゝ、龍南の味だと思ひます。必しも噴煙に直接關係の無い阿蘇の持ち味、それこそ龍南の標語「剛毅木訥」の眞の味では無いでせうか。

龍南の三十年を一貫して居るものは何よりも此の味だらうと思ひます。龍南が龍南生活者に與へる最高の感化も亦、此の味でせう。而かも此味は、外から加つた味ではなく、内から涌いた味である、謂はゞ彼の本性である、そこに私は、此の三十才の健兒龍南を尊敬し祝福すべき第一の理由があると思ふのです。

—(九、十、十一、夜)—